

JL NEWS

Japan League on Developmental Disabilities



発達障害・知的障害のある人を 深く理解し、支援するために

日本発達障害連盟 会長 小澤 温

発達障害・知的障害のある人の生活を深く理解することは支援をする上で大変重要です。しかしながら、障害のある人や家族の暮らしを、病気や障害ではなくて、その障害特性を十分理解した上で生活者としてみることは、その障害のもっているわかりにくさもあって、なかなか理解しにくいことです。

ここでは、障害特性とそこから派生するさまざまな問題を考える前提として、生活についてふれたいと思います。生活にはさまざまな側面があるといわれています。生活をQOL(生活の質、あるいは、人生の質)の視点でみると、健康、労働、経済生活、家庭生活、社会参加、趣味、文化活動、レクリエーション活動、といった側面でとらえる必要があります。また、生活を「生活遂行上の問題」として位置づけ、健康、住宅、教育、雇用、介護などの側面でとらえることも必要です。いずれの見方も生活というあいまいな領域に対して、いくつかの側面に分解してとらえようとしている点では共通しています。

しかし、生活をこのような側面に分解してとらえよ

うとする考え方とは別に、これらの側面の相互関連から生活(生活上の問題)が生じているとして、生活を全体性としてとらえる考え方もあります。また、QOLを人生の質としてとらえる考えには、現在の生活が過去の生活とのつながりで生じ、さらに、未来の生活へつながっていく人生の連続性の中で生活を理解しようとする考えもあります。

発達障害・知的障害のある人を支援するためには、さまざまな生活領域に広がっていく視点とその方の人生という時間的な視点の2つの交わりでみていくことがとても大事です。

このような視点を身につけていくために、「自閉症セミナー」「支援者を伸ばす実践セミナー」「発達障害医学セミナー」は企画されています。この研修セミナーを受講することにより、受講された方が発達障害・知的障害を深く理解し、支援するための力となって、本当の意味での日本の共生社会づくりの基盤になっていくことに貢献できたら、日本発達障害連盟としてこの上のない喜びです。



公益社団法人 日本発達障害連盟

編集：公益社団法人 日本発達障害連盟 会長 小澤 温
〒114-0015 東京都北区中里1-9-10 パレドール六義園北402
TEL：03-5814-0391 FAX：03-5814-0393 URL：http://www.jlidd.jp/

私たちは、世界の知的障害・発達障害のある人々が、障害のない人と共に参加する共生社会の実現を目指しています。

発行：障害者団体定期刊行物協会 (SSKP)
〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷3-1-17 ヴェルドゥーラ祖師谷102
※無断転載・複製を禁じます。 2022年6月6日発行 定価100円

自閉症支援を考える ～コアスキルを学ぶ研修～

日本発達障害連盟 常務理事／（社福）横浜やまびこの里 相談支援部長 志賀利一

「自閉症とは非常に稀な障害だ」と知的・発達障害分野の新入職員だった頃、先輩から教わりました。40年前の話です。それから10年経ち、職場の中堅になる頃、アメリカの自閉症協会のパンフレットには0.15～0.20%の有病率と書かれていました。さらに30年。新型コロナウイルスの研究で有名になったCDC（アメリカ疾病予防管理センター）の2018年調査では、44人に1人（2.27%）に跳ね上がっています。

自閉症の人が増えるということは、様々な状態像の人がこのグループに含まれることを意味します。成人になった自閉症の人の中には、非常に重い知的障害があり自傷や他害といった著しい行動障害を呈する人がいる一方、職場で一定の配慮を受けながらフルタイムで就労している人もいます。さらに、学術やビジネス分野で大成功を収めている人もいます。しかし、どのような状態像であったにしても、自閉症の人は発達期の初期から、脳の特定の機能の障害があり、それが何らかの行動に表れている人です。そして、この障害の特徴は、長年の研究成果として明らかになってきており、必要な配慮事項について大まかに整理されています。

自閉症支援の歴史は長く、多くの研究成果が蓄積されているにもかかわらず、障害福祉や特別支援教育の分野等では、一人ひとりの自閉症の人にマッチした支援が提供でき

ず、本人も支援員・教員が困惑している状況によく出会います。自閉症の特性や必要な配慮事項についての知識が不足している実践現場なのかもしれません。あるいは、字面としての知識はあるものの、それをどのように活かしていくべきか、継続的に実践を続けていくスキルや実行力が足りないのかもしれません。

今回リニューアルした研修では「自閉症支援のコアスキルを学ぶ」ことを目標にプログラムを組み立てました。また、知的障害のある自閉症の児童・成人を中心に、障害福祉や特別支援教育分野で必要とされる最も基本的な内容に焦点を当てたつもりです。この2日間の研修で、残念ながらコアスキルが身につくわけではありません。実践現場で自閉症の人と触れ合いながら、コアスキルを身につけていくために不可欠な学びの方向性を、講義と演習と実践報告で伝えられればと、講師陣で討議しながら組み立てたプログラムです。

多様性を認め合う共生社会を私たちは目指しています。自閉症の人に社会の仕組みを理解してもらうことも大切ですが、自閉症ではない多数派の方から自閉症の人に歩み寄ることも非常に大切な時代です。ぜひ、本研修に参加し、今の時代に合った自閉症支援のコアスキルと一緒に学びましょう。

2022年度 自閉症セミナー

共生社会の実現を目指した自閉症支援を考える

～自閉症支援のコアスキルを学ぶことから～

日程 2022年9月10日（土）～11日（日）

※2日間のセミナーです。

場所 北とぴあ ペガサスホール 他（東京都北区王子1丁目11-1）

定員 100名

講師 志賀利一（横浜やまびこの里）・日詰正文（国立のぞみの園）

縄岡好晴（明星大学）・宮崎義成（NPO 法人あおぞら）・種村祐太（NPO 法人 発達障害サポートセンター ピュア）

内
容

9月10日
（土）

10:00
}
16:00

- ◆自閉症支援を学び続ける長い旅路—自らのキャリアを振り返り— [講師：日詰正文・志賀利一]
- ◆自閉症支援の事例紹介
- ◆グループワーク1：自己紹介と自閉症支援の課題（意見交換）
- ◆講義と演習の説明：違いを認めることから始まる
- ◆グループワーク2：障害特性を学んでいくには（意見交換）
- ◆グループワーク2のまとめ

9月11日
（日）

10:00
}
15:40

- ◆グループワーク3：コミュニケーション機能を学ぶ（意見交換）
- ◆グループワーク3のまとめ
- ◆自閉症支援の事例紹介
- ◆自閉症支援の事例紹介
- ◆グループワーク3：自閉症の人に歩み寄る支援とは（これからやるべきこと）
- ◆グループ発表：2グループ単位でお互い

子ども支援・家族支援を考える

～支援の手だて、支援計画の立案、保護者面接を学ぶ研修～

日本発達障害連盟 理事／東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター 教授 **橋本創一**
日本発達障害連盟 理事／星槎大学大学院教育学研究科 教授 **西永 堅**

児童発達支援・放課後等デイサービスや保育所・幼稚園における発達障害のある子どもへの支援は、各地の事業所・園で、支援者の情熱と創意工夫により豊かな実践が展開されています。しかし、あらためて「難しいなあ」と感じる場面も少なくありません。その理由に、「ひとり一人の子どもの姿が違う」「乳幼児？児童期は障害特性による支援ニーズが著しい」「適切な支援（療育）や対応であるかの評価・成果が見えにくい」「さまざまな保護者へ支援や連携には高度な技術がいる」という声を聴きます。つまり、自閉スペクトラム症やダウン症などの障害名にのみ注目した支援の実践ではなく個人差に注目した個別支援の実践をすること、子ども期から成人期を見通した生涯発達を意識した上で加齢に応じて変化する支援ニーズを捉えること、子ども支援の実践の評価・成果をどのように明確化するかを工夫していくこと、保護者カウンセリングや保護者との連携をうまく実践するためのカウンセリング技術・コンサルテーションスキルなどを身につけること、などが求められているということになります。障害のある子どもの支援職は、そうした研修を進めるために、講義〈基礎～応用〉により知識を得て、演習〈話し合い～創ってみる〉か

ら体験して考える、とされる研修が必要と考えます。

本研修は、講義内容として、「発達障害のある子どもを理解する（見たて・アセスメントの読みとりについて）」、「発達障害のある子どもの支援方法と対応の手だて（効果的な支援と環境調整について）」、「様々なフィールドにいる発達障害のある子どもと家族を知る（現況について）」、「家族支援と保護者面談、連携について」、ワークショップ型の学びとして、「グループ内の情報交換（自身の所属機関の対象者を匿名で紹介し合う）」、「発達障害のある子ども（事例）への対応を考える〔支援計画の立案含む〕」、「保護者（事例）への面談・連携を学ぶ〔ロールプレイング含む〕」、「子どもへの支援を考える〔討論・報告書含む〕」、「保護者対応・連携について考える〔討論・連携方法含む〕」をプログラムとしています。子どもの支援と家族との連携・支援について、初心者・中堅者・管理職などの経験・職層に応じてグルーピングし、知識・技能・態度をパワーアップしていただき、翌日からの事業所・クリニックや園などですぐに活かしていただきたいと思っています。

2022年度 支援者を伸ばす実践セミナー

【講義/演習から学ぶ】子ども支援・家族支援の実践セミナー

～子ども支援の手だて、支援計画の立案、保護者面接の実際の事例を通して～

日程 2022年10月29日（土）～30日（日） ※2日間のセミナーです。

場所 北とぴあ ペガサスホール 他（東京都北区王子1丁目11-1） **定員** 100名

講師 橋本創一（東京学芸大学）・西永 堅（星槎大学）・堂山亜希（目白大学）・田中里実（青山学院大学）・三浦巧也（東京農工大学）

内容

1日目：10月29日（土） 10：00～17：30

- ◆【概論講義1】発達障害のある子どもを理解する（見たて・アセスメントの読みとりについて） [橋本創一]
- ◆【概論講義2】発達障害のある子どもの支援方法と対応の手だて（効果的な支援と環境調整について） [西永 堅]
- ◆【概論講義3】様々なフィールドにいる発達障害のある子どもと家族を知る（現況について） [堂山亜希]
- ◆【実践講義1】家族支援と保護者面談、連携について [田中里実]
- ◆【実践講義2】ABAによる支援の実践 [西永 堅]

2日目：10月30日（日） 9：30～16：30

- ◆【演習1】グループ内の情報交換（自身の所属機関の対象者を匿名で紹介し合う） [橋本創一]
- ◆【演習2】発達障害のある子ども（事例）への対応を考える（支援計画の立案含む）
- ◆【演習3】保護者（事例）への面談・連携を学ぶ（ロールプレイング含む）
- ◆【シェア1】子どもへの支援を考える（討論・報告書含む） [橋本創一]
- ◆【シェア2】保護者対応・連携について考える（討論・連携方法含む） [三浦巧也]

発達障害の診断は変わるものか

日本発達障害連盟 理事 / 青山学院大学教育人間科学部教育学科 教授 古荘純一

一度診断された後、診断名が変わるのは誤診ではないか？ 皆さんはそう考えるでしょう。確かに多くの身体疾患では、客観的に検査データや画像所見を基にした診断基準があります。診断がはっきりしない時には、〇〇病疑いとして経過観察することもあります。一時的なもので、できるだけ早く診断が行われます。

一方、発達障害の診断名は、精神医学に依拠しています。診断基準にあがっている症状何項目中いくつかをそろえて基準を満たすという方式で、「操作的診断」と呼ばれるものです。それが一定の期間（発達障害では6か月以上）にわたり出現し、その症状により日常生活に変調（disorder）をきたしていれば診断できることになっています。

そもそも身体疾患は〇〇病（disease, illness）や症候群（syndrome）と呼ばれますが、精神疾患は□□症もしくは障害（disorder）であり、用語としても別のものになります。

子どもの症状は、年齢とともに目立ちやすい症状と目立ちにくい症状があります。幼児では、多動であったり不注意であったりするの当然です。ADHDの診断基準で「課題や活動を順序立てることが困難である」「容易に注意をそらされる」「順番を待てない」「落ち着いて座っている

ことが難しい」などは、幼児期には多くの子どもにみられますが、就学以降では、目立つことが少なくなります。幼児期にADHDと診断し早期療育や薬物治療を行い、その症状が改善しても、本当に療育や治療がよかったのか、自然経過なのか疑問が残ります。

運動発達の遅れは幼児期早期までに、言葉の遅れは2歳から3歳までに、不注意や多動は就学時前に見られることが多いのですが、学習面の問題、コミュニケーションの問題、こだわりなどの問題は就学時以降に明らかになっていくこともあります。受診する時期により、同年代の子どもと比べて明らかに目立つか、日常生活に変調をきたしているかは異なるものです。したがって診断も変わっていくこともあるのです。同一の人で、幼児期にADHDと診断され、学童期にはチック症とASDの診断がなされて、思春期になると、ASDのこだわりの症状のみ残存することもあり得ます。

診断名が変わるのは、診断方法に限界があるためです。皆さんは診断名にこだわりすぎず、その時期その時期に必要な支援法を考えていただければと思います。一方で医療従事者は、診断の見直し、返上も含めてその人の発達軸で支援法を検討すべきと考えています。

2022年度 発達障害医学セミナー

自閉スペクトラム症（ASD）支援のアップデート

コーディネーター 古荘純一（青山学院大学）

日時 2022年12月17日（土）10:00～17:20

※今年度は1日のみの開催です。

場所 青山学院大学渋谷キャンパス
（東京都渋谷区渋谷4-4-25）

定員 100名

コロナ禍の影響で、環境の変化に弱い発達障害児、特に自閉スペクトラム症の人にはより困難な日々が続く、旧来以上の支援が待ち望まれています。今回のセミナーでは、さまざまな支援の現状について、専門の先生に講義をお願いしています。最近の知見はもちろん、旧来より行われてきた療育や応用行動分析についても臨床知見を包括的にご教示いただけるものと考えています。

講演内容

- 10:00～11:00 境界知能と発達障害 / 宮口幸治氏（立命館大学産業社会学部 教授）
- 11:10～12:20 自閉スペクトラム症における応用行動分析 / 松田幸都枝氏（㈱チルドレン・センター 代表）
- 13:30～14:40 自閉スペクトラム症の療育 / 高木一江氏（横浜市中部療育センター 所長）
- 14:50～16:00 自閉スペクトラム症の併存症とその治療 / 井上祐紀氏（福島県立矢吹病院 副院長）
- 16:10～17:20 ロボットおよび人工知能を用いた自閉スペクトラム症の支援 / 熊崎博一氏（長崎大学未来メンタルヘルス学分野 教授）

※一部オンラインに変更になる可能性があります。講演のタイトルや時間割が変わる可能性もあります。

2022年度 各セミナーの
お問い合わせ先はこちら▶▶▶

（公社）日本発達障害連盟 セミナー担当 〒114-0015 東京都北区中里1-9-10-402
電話：03-5814-0391 FAX：03-5814-0393 E-mail：seminar22@jldd.jp